

コロナ禍における授業実践 —デジタルツールの活用とフィードバック—

間合 絵里

東京農業大学国際食料情報学部 助教

コロナ禍となり1年ほどが経過した2021年4月、東京農業大学に助教として着任した。それまで筆者は私立大学に身を置いたことがなく、学生数の多さにまず驚いた。着任して間もなく行われた入学式は、学科ごとに割り当てられた教室に新入生を集め、主会場の中継映像を視聴する形であったが、それがコロナ禍特有の対応かどうか判断がつかなかった。各学年でのガイダンスと顔合わせを済ませると、すぐに前学期の授業が始まった。前任の大学で授業の一部を分担したことはあったが、主担当として授業を受け持つのは初めてであった。着任後2年が経ち、授業実践にあたって多くの苦労と学びがあったので、本稿では講義と実習の2つの授業形式から振り返りたい。

まず、筆者が担当する講義形式の科目として、野菜

の生態、栽培と利用、食文化との関わりなど、野菜について食と農の視点から教えるものがある。これは学科の必修科目であり、約130名が受講する。2021年度は教室の収容可能人数が従前の半分に制限されたため、隣り合う2つの教室を使用して、主教室では筆者が対面で講義し、副教室へ画面と音声を共有する連結授業の形態をとった。着任して間もない緊張感の中、開始30分前から接続テストをして初回の授業に臨んだことを思い出す。連結授業を行う科目には学生サポーターが毎回配置され、接続の補助をしてくれたので大きなトラブルなく実施することができた。このような教育支援体制は、授業に不慣れな教員には大変ありがたかった。連結授業を受講した学生からは、机が広く使えるなどの肯定的な意見があった一方、教員のいない教室では授業に参加している実感が無いとの意見もあった。筆者としても、対面で授業をしているにもかかわらず学生の半数は姿が見えない状態であり、話が伝わっているか把握するのが難しかった。従前であれば、頷きや挙手によって学生の反応を見ることができたであろう。

そこで、Mentimeter というウェブサービスを取り入

れ、教員と学生のやりとりの機会を持つようにした。学生が手持ちのデバイスからアクセスし、投げかけた質問に回答すると、それぞれの教室のスクリーンにリアルタイムで結果が表示される。ワードクラウドでは回答数が多いいものが大きな文字になり、変動していくので学生には視覚的にも楽しんでもらえた。また、結果を見ながらその場でコメントを加えることで、フィードバックも可能であった。回答は自動で集計されるので、大人数の授業では利便性が高いと感じた。スマホに慣れたZ世代の学生にとつて、こうしたデジタルツールは取っ付きやすく、授業への参加意識を高めるのに有効ではないだろうか。

ちなみに、筆者が学生の頃は授業中にスマホを含む情報端末を触らないよう指導されていた。コロナ禍において大学教育のデジタル化は急速に進み、授業中の情報端末の利用に関する考え方も大きく変化した。学生の興味を引き、積極的に授業へ参加してもらうために、今後デジタルツールを活用したインタラクティブな授業を実践していきたい。

次に、実習形式の科目として、附属農場で野菜を栽培し、その生産加工技術を習得するものがある。この科

目は、農作業の実体験を通して学ぶことに重きを置いている。2021年度から対面で実施できたが、マスクを着用した状態での夏の農作業は苦しく、筆者も学生も熱中症になりかけた。それでも、トマトの葉が放つ独特の匂い、果実の色や硬さ、枝を切る音など五感を通して得られるものは多く、実習後のレポートにはいつも農業に対する驚きと感動が書き添えられていた。筆者は提出された全てのレポートに目を通し、返却している。これは学生の理解度を確かめるだけでなく、農業の現場で湧き出る初学者ならではの疑問や着眼点を吸い上げて実習内容を直視し、授業改善を図るためでもある。手間のかかる作業だが、今後も継続したい。

最後に、早いもので2023年度は筆者の着任と同時に入学した学生が3年生になる。着任以来多忙な日々が続いているが、活力に溢れた学生達と過ごす時間は濃く、元気をもらうことも多い。学生数の多さに圧倒されていた頃と比べ、学生一人一人と丁寧に向き合えるようになってきたとも思う。引き続き、学生の声を積み上げ、互いに実りある授業となるよう邁進したい。